

2015.4.18

生誕150年 “北欧の巨人 シベリウス” 第2回

プログラム

今日は、今年生誕150年を迎えた北欧フィンランドが生んだ大作曲家、シベリウスを特集するシリーズの第2回をお送りします。

交響詩「伝説」は当時のフィンランドの名指揮者、カヤヌスの依頼によって作曲された最初の交響詩で、特定の物語に沿った音楽では無いのにもかかわらず、幻想的で神秘性に富んだ曲想は、北欧伝説の雰囲気醸し出しています。シベリウスの出世作となった傑作です。シベリウスは100曲に及ぶ歌曲を残していますが、演奏される機会は決して多いとは言えません。中では作品37が良く知られた歌曲集で、“恋人との逢い引きから帰った娘と母親とが対話し、結局裏切られたのでお墓を用意して、と歌われる「逢い引きから帰った少女」は特に知られた名作です。4曲残された弦楽四重奏曲のうち、シベリウスの弦楽四重奏曲といえば二短調の「親しき声」を指すことが一般的で、シベリウスならではのシンフォニックな重厚さを持った5楽章形式による独創的な名曲です。標題の「親しき声(親愛なる声)」は、シベリウス自身の第3楽章の楽譜の一部に“Voces Intimae(内なる声、親しい声)”という書き込みがあったためですが、第1楽章冒頭のヴァイオリンとチェロの対話にそれを感じさせる、とも言われています。組曲「恋人」は、1893年に作曲された男声合唱曲を管弦楽用に編曲した作品で、すっきりとまとまった美しい佳曲です。シベリウスと言えば交響曲第2番と言われる程、シベリウスの代名詞的な名シンフォニーがこの第2番で、1901年、36歳の時に作曲され、翌1902年シベリウス自身の指揮で初演されました。フィンランドの民謡的な色彩が全曲を支配し、高揚感を持続させながら壮麗なクライマックスを築き上げて行く第4楽章は特に感動的です。今日はフィンランドの名指揮者セーゲルスタムの最新の録音による名演でお楽しみください。(中川)

ジャン・シベリウス (1865.12.8~1957.9.20):

交響詩“伝説(エン・サガ)” op.9

セルジユ・チエリビダツク指揮スウェーデン放送交響楽団
(1969.5.20 ヘルシンキ、ハウス・オブ・カルチャーでのLive)

歌曲集“5つの歌” op.37

初めての口づけ” op.37-1 / 逢い引きから帰った少女 op.37-5

ソイレ・イソコスキ(ソプラノ)/マリタ・ヴィタサーロ(ピアノ)
(2006.6.23 ロンドン・ヴィグモアホールでのLive CD盤)

弦楽四重奏曲二短調“親しき声” op.56

~第1楽章、第3楽章から、第4、第5楽章

エマーソン弦楽四重奏団
(1999.7.20 アイヒシュテット旧市立劇場でのLive)

*** 休憩 ***

ジャン・シベリウス (1865.12.8~1957.9.20):

組曲“恋人” op.14

1. 恋人 3. こんばんは一さようなら (「2. 愛する人の通る道」は割愛)

クシシュトフ・ペンデレツキ指揮ローザンヌ室内管弦楽団
(1993.1.11 ローザンヌ、ポーリユール劇場でのLive)

交響曲第2番二長調 op.43 ~第1楽章、第2楽章から、第3、第4楽章

レイフ・セーゲルスタム指揮フランス国立管弦楽団
(2014.10.30 シャンゼリゼ劇場でのLive)